

教育におけるミメーシスに関する研究
—Ch.ヴルフのミメーシス論における身体性に着目して—

専攻 学校教育学
コース 教育コミュニケーション
学籍番号 M07009E
氏名 佐々木 暢子

I. 問題の所在

これまでの人間形成論は、西洋中心の進歩史観、一元史観に支えられた「進歩」「発達」を自明の前提としていた。そこでは、「主体」が目的合理的に「自己実現」や「自己成長」を遂げていく人間形成のあり方が主題となった。また、「人間」を問題とする人間学において目指すべき人間像が近代の理性、主体中心の思考システムによって支配されていたことに対応して、人間形成論においても知性や精神の涵養が重視され、身体は機能的・客観的に捉えられ、軽視されてきたのである。

そこで本研究は、人間形成論のあらたな可能性を探るため、「ミメーシス」に着目する。ミメーシスとは、一般に「模倣」と訳される。模倣には、教育と教育学において一般に負のイメージが付与されてきた。現代の学校教育においても、他人の模倣は個性や創造性の欠如として排除され、また、模範となる所与の枠組みに子どもをはめ込むことは避けられるべきだと考えられている。

しかし、近年の歴史的人間学の研究によれば、模倣は単なるコピーではない。クリストフ・ヴルフによれば、ミメーシスの過程は、自らの身体を介して、モノや人、世界といった「他者 (Andere)」に自己を同化させることによって、他者の意味世界を自己の中に取り込み、他者を知ると同時に自己と他者の差異を明らかにする過程である。また、他者の世界を獲得することで、新たな自己の世界を作り出していく過程である。すなわち人間は、模倣、同化、差異化というミメーシスの過程によって習得した事柄や世界を、身体を介し、身体で表現することによって、新たな自己の世界を作り、その世界を外へ表出することができるのである。

人間形成においてミメーシスは、自己の世界の拡大と、多様化をもたらすのである。

そこで本研究では、ヴルフのミメーシス論を手がかりとして、本来社会形成や知識形成の基礎としての意味を持っていたミメーシス概念に着目し、この広義のミメーシス概念によって人間形成の過程を捉えなおす。そして、主体の自己実現や自己成長のプロセスとして語られてきた従来の人間形成論の限界を明らかにし、他者への同化、差異化というミメーシスの過程の中で自己を拡大させる、ミメーシスによる人間形成のあり方を考察する。そのことにより、近代教育によって見落とされてきた人間形成の側面が明らかになるだろう。

II. 論文構成

序章

第一章 ミメーシス概念の歴史

第二章 Ch.ヴルフのミメーシス論

第三章 Ch.ヴルフの美的人間形成論

第四章 ミメーシスの身体性

終章

III. 論文概要

本研究は Ch.ヴルフに依拠しながら、教育におけるミメーシス概念を捉えなおし、人間形成の新たな可能性を探求するものである。

まず、第一章では、古代ギリシアを起源とするミメーシス概念が、ミメーシス（模倣）の教育的意義を見出しながらもミメーシスへ制限を設けたプラトンと、ミメーシス（再現）の創造的側面を強調したアリストテレスを取り上げる。とくに

アリストテレスのミメーシス論は、西欧芸術論の中心的な理論となった。しかしながら、18世紀後半において、自律した美を扱う学としての美学が成立し、芸術論は美を感じずる人間の内面の探求へと移行したことで、ミメーシス理論は芸術理論の中心的な理論ではなくなった。だがベンヤミン、アドルノらによって、ミメーシス概念は管理社会やファシズムといった理性による自然の支配から人々を解放する可能性をもつ概念として再び注目されることとなった。

第二章では、ベンヤミンやアドルノのミメーシス概念を継承し、人間形成の問題へと発展させたクリストフ・ヴルフのミメーシス論について言及した。ヴルフは文化的、社会的な側面からミメーシスの概念を検討し、広義な概念として捉えなおしている。さらにヴルフは、ミメーシスの過程を人間が言語を獲得する以前において、無意識的にすでに行っている能力であるとし、対象の知覚・認識の過程として位置づける。

第三章では、ヴルフの人間形成論は、芸術作品だけではなく、歴史的・文化的に規定された人間の行動形態をも対象とした広義の美的人間形成論である。現代社会の特徴である「生活世界の美学化」は過剰な欲望を生み出し、想像力を溺死させる危険がある一方で、ヴルフは肯定的側面も見出している。ヴルフは像へのミメーシスによる自己の内的世界の形成を人間形成の基礎と置き、外界との関わりの中で常に内面世界を作り変えることを要求している。

さらに第四章では、ミメーシス行為の創造的側面を明らかにした。今日においても心身二元論的な身体観は根強く、人間形成論へも影響を与えている。ミメーシスは精神・身体という二項対立に収斂されない人間形成の可能性を含んでいる。また、ミメーシスには芸道における意識的な威光模倣だけではなく、無意識的なミメーシス行為も含まれる。そのため、意識的・無意識的ミメーシス行為として歴史的・文化的に意味づけられた身振りや、儀礼を取り上げ、ミメーシス行為の創造的な側面を明らかにした。人間形成において肯定的

には捉えられてこなかった模倣行為だが、ミメーシスによる身体的行為遂行性（パフォーマンス性）により、自らを再帰的に反省し、自己世界をそのつど作り変える可能性があることを示した。

IV. 結語

身体的・感覚的レベルにおいてなされるミメーシスは、意識的・無意識的に、また非連続的になさるところに特徴がある。また偶然性を持つため、ミメーシス行為を意図的に計画したり、コントロールしたりすることはできない。

ミメーシスを人間形成の問題として捉えた場合、ミメーシス過程における自己の内的世界の形成と拡大が最も重要である。既存の世界にミメーシスすることによって自己の内面世界が形成される。そしてその内面世界を振舞うことによって、内的世界は具現化され、自己の世界が産みだされる。振舞いには歴史的、文化的背景が強く反映しており、振舞うことによって自己の内面世界と既存の世界を再帰的に見ることが可能となる。つまり、自己の内面世界は、自らが振舞うことによって反省の対象となり、また同時に、既存の世界を作り変える可能性を持つことになるのである。ミメーシスの過程は他者の他者性を保持し、人間の多中心性を支えながら、既存の歴史的・文化的な社会と、自己の内面世界の改新という教育的役割を果たすのである。

対象に同化するようなミメーシス過程が生起する条件として、ヴルフは、集中力と思考力によって内的イメージに対象を固定することを挙げている。では、集中力と思考力は人間の能力としてどのように位置づけられるのだろうか。さらに、ミメーシスの暴力的側面、感染的側面は、教育問題としての内容を含んでいる。ミメーシスによる人間形成論は既に指摘されている教育問題に対してどのように答えることができるのか検討することが今後の課題である。

主任指導教員 杉尾 宏
指導教員 大関達也